

第 2 回総合戦略推進アドバイザー懇談会議事録

日程	令和8年2月25日(水)～3月6日(金)
場所	美濃加茂市生涯学習センター及び訪問先
委員	【産】(株)フジイ 代表取締役 金森 薫氏 【労】(株)濃飛葬祭 代表取締役 鈴木 哲馬氏 【学】中部学院大学短期大学部幼児教育学科 教授 杉山 祐子氏 【学】元可茂教育事務所所長・元太田小学校校長 三尾 不二男氏 【学】元加茂高等学校校長 平野 弘氏 【金】東濃信用金庫美濃加茂支店 支店長 佐藤 幸一氏 【言】(有)コニー 代表取締役 伊佐治 栄子氏 【言】みのかもフリーパーパー歩好里人 代表 安藤 摩里氏 【国】のぞみ教室 主任指導員 藤木 燦斗良 春美氏
事務局	経営企画部 企画課

1. 第3期総合戦略事業編への掲載追加事業について

第3期美濃加茂市まち・ひと・しごと創生総合戦略事業編への掲載追加候補の事業についての意見、提案は以下のとおり。

【アドバイザーからの意見】

○「牧野ふれあい広場事業」について

- ・牧野ふれあい広場は美濃加茂市にようやくできた大きな陸上競技施設であり、今はまだ新しく美しい状態であるが、使わなくては劣化してしまう。日常的に使用するだけでなく、大会などを開催することが施設の維持に繋がると思われる。
- ・大会を開催し、人の流れを作ることができると良い。
- ・スポーツを経験したこどもは精神が鍛錬され、礼儀や打たれ強さといった面に現れる。心身ともに強く健やかな人材を育成するためにもスポーツを振興することは非常に重要である。
- ・以前は野球やサッカーといった競技がポピュラーであったが、オリンピックなど見ていても分かるように、スケートボードやブレイクダンスなどストリートスポーツの人気の高まりつつある。美濃加茂市にもスケートボードなど流行のスポーツ施設ができると良い。

○「かわまちづくり事業」について

- ・今後もリバーポートパーク美濃加茂で様々な催し物を開催していくことで、市は PR のノウハウを学び、魅力をアピールするスキルの習得が期待できる。
- ・企業版ふるさと納税の観点から、今までのイベントの事例を挙げることでどんな事業かが企業に伝わりやすく、アピールしやすい。

○「次世代定着人材確保種まき事業」について

- ・かもっこ labo バスツアーは製造業が中心のようだが、他の職種も知ることができると良い。様々な職種を知ること、将来何がしたいかを知るきっかけとなり、こどもたちは今何を学ぶべきかなど

未来に向かう道筋が見えるようになる。

- ・地元企業を知ってもらうことは大事だが、何よりもそこで働く人の「仕事にける思いや誇り」を伝え、感動を与えられると良い。
- ・生まれた町を愛するきっかけになると良い。

2. 第2世代交付金活用事業について

第2世代交付金活用事業である「あい愛バスがふれ AI(あい)バスになる事業」と「未来へつながる居場所づくり事業」についての意見、提案は以下のとおり。

【アドバイザーからの意見】

○「あい愛バスがふれ AI(あい)バスになる事業」について

- ・乗り合いという特徴から、移動中も交流の場になると良い。また、実証実験では運行時間が9～16時とされていたが、通学や通勤に利用するには難しいため、運行時間が増えると良い。
- ・森山団地は住民の高齢化が進んでおり、高低差のある地形から、外出を困難と感じる住民が存在する。また、近くにスーパーなどが存在せず、生活に不便を感じている者も少なくない。デマンドバスの事業のように、困っている住民に目を向ける事業が存在することは非常に良い。
- ・既存の路線バスと比べ、電車など他の公共交通機関との接続が良く、待ち時間の短縮が期待される。また、帰宅時など利用者が多くなる時間帯では、路線バスの場合、満席によって乗車できないなどの問題があるが、予約制のデマンドバスならその懸念がない。
- ・実証実験のアンケートで外に出る意欲が向上したという結果が出ている。家に籠らず外に出ることで、健康寿命の延伸にも繋がると考えられる。
- ・高齢者がデマンドバスで通院することができれば、送迎を行う家族の負担を減らすことができる。

○「未来へつながる居場所づくり事業」について

- ・中学生までの年齢であれば、支援員やスタッフとのやりとりは親を通すことが安心に繋がるため、支援員と親との関わりも重要である。また、こどもだけでなく、親への支援も必要である。学生同士だけでなく、親同士も繋がる場所になれば良い。
- ・親に対する支援について、親はこどもの相談したくとも、学校のように母体の大きなところへは行きづらさを感じてしまう。あじさいスペースやユースセンターで支援員に相談し、次の支援に繋げることができると良い。そういったことから、スタッフの関わり方は非常に重要であるため、人材の確保が課題と思われる。
- ・生涯学習センターの6階という立地は、「ちょっと寄ってみようか」というには少し条件が悪いように思う。「行きたい」と興味を持ってもらうため、PR など積極的な取り組みが必要。
- ・外国籍を持つ不登校のこどもからすると、まだまだ利用が難しい施設のように思う。なぜなら、そういったこどもたちは、日本語が話せないことから学校に馴染むことができず、不登校になるパターンが多いためである。フリースペースやユースセンターよりも、ネットゲームで同じ国籍の人と繋がったり、別の場所で同じ国籍のグループで集まったりすることの方が多いた方が実情。
- ・不登校のこどもを持つ親は働きに出ることができず困っている。あじさいフリースペースのような場所の存在を切実に願っている人たちは多い。もっと周知を行うべきである。

- ・経済的な理由から塾へ通えない子どもにとって、学校終わりに勉強ができる場所は貴重である。また、部活動をしない子どもが増えたため、放課後の居場所としてもユースセンターは必要と考えられる。

- ・ひとり親世帯の子どもは放課後、帰宅しても家にひとりという事が多い。誰かと話せる自分の居場所が家庭以外にも存在することで、子どもも親も安心することができる。

- ・子どもは親には言えないこともあるため、家でも学校でもない第三の居場所としてフリースペースやユースセンターは必要。また、現状の打破には他者との交流が必要不可欠の場合があることや、熱中できるものとの出会いが社会へ出るきっかけとなることがあるため、そのような出会いも提供することができれば良い。

3. その他

- ・不登校だった子どもや一部の人は、さまざまな理由から短時間勤務しかできない状態にある。そういった人たちの社会の接点かつ収入を得られる場所として、企業は短時間勤務という働き方を新たに作っていかなければならない。今後、加速すると言われている人材不足に対応するためにも必要と考えられる。

- ・県外へ出ていった若者が、生まれ育った美濃加茂市で子育てをしたいと考え、実際に戻ってくる、というのが理想。東京にある「岐阜トーキョー」のように、都会にしながら地元の情報を獲得できる場所や移住を支援する場所が必要。